PDF Compressor Free Version

「大学周辺地域の歴史を知る」シリーズ　第一号

私たちの知らない『野寄のより』

協力

本山西ふれあいのまちづくり協議会

野寄地域の皆さん

編集者

甲南大学 久保ゼミ

発行年月日 2017 年 5 月

責任者　甲南大学法学部　久保はるか教授

PDF Compressor Free Version

まえがき

二〇一六年度、甲南大学法学部久保ゼミでは、ゼミ活動の一環として『私たちの知らない「野寄」』という冊子を作成することになりました。この冊子は、野寄地域に古くから住んでおられる方々の体験を通して、野寄地域の歴史や地域の個性を知ることを目的としています。野寄地域に長年お住まいの方々に、野寄での生活や幼少時代の思い出、地域の行事、各種団体などについてお話を伺いました。お話を伺ったのは、四〇代～八〇代という幅広い年齢層の方々で、それぞれの年代のご体験から野寄地域の歴史を見ることができます。ムラ的と言われる野寄の地域性や、往吉川など野寄の景色の移り変り、戦時中に焼失した野寄の「だんじり」を復活させた経緯と野寄における「だんじり」の位置づけについて、それぞれの年代の方々から伺いました。戦争を体験された八〇代の髙井さんには、戦前戦時中の野寄の様子について貴重な話を伺いました。さらに、久保ゼミでは二〇一三年一〇月三一日に、前野寄財産区会長の渡辺利信さんにもお話を伺っており、その時に伺った内容をまとめたものも掲載しております。渡辺さんは二〇一六年三月に八八歳で逝去されました。ご冥福をお祈りいたします。

さて、私たちは、この『私たちの知らない「野寄」』を次のように活用してもらいたいと考えています。

①野寄の歴史を知る人が少なくなってきている中で、文字に起こして冊子という形に残すことで、地域の伝統を将来の世代に残すことができる。

②地域住民や地域のことをあまり知らない地域の子どもたちに『私たちの知らない「野寄」』から野寄の歴史を知ってもらい、より一層地域に愛着を感じるようになってもらいたい。

③新しく移り住んだ住民の方にも『私たちの知らない「野寄」』を読んでいただき共通の話題ができたら、新旧住民同士のつながりが強くなるのではないか。

④野寄地域に接し、日頃から住民の方に見守っていただいている甲南大学の学生にとっても、野寄地域について知り、興味を持つきっかけになってほしい。

当冊子の作成に際しては、野寄財産区会長の木下昭満さんに住民の方を紹介していただきました。木下会長、取材に応じてくださった皆様、会場をご提供くださった本山西地域福祉センターの皆様、この度はご協力いただきまして誠にありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

野寄地域では現在、木下会長が中心となって、古くなった『本山村誌』の内容を更新し、野寄地域に特化した『野寄村誌』を新たに発行する予定です。文章を現代風にアレンジし、読みやすくなっているそうです。こちらもぜひともご一読いただければと思っております。

目次

「渡辺さんの音声記録」――渡辺　利信さん　3頁

「私と地域とのかかわり」――木下　昭満さん11頁

「私、が生きた野寄と歴史」――坂本　武士さん18頁

「引き継がれる村 野寄」――船引　泰造さん21頁

「野寄との思い出と関わり」――藤本　圭子さん　24頁

「大正から平成 野寄の歴史と私の記憶」髙井　史郎さん28頁

PDF Compressor Free Version

渡辺さんの音声記録（本山西地域の「野寄」について）

前委員長　渡辺利信さん

一　昔の野寄地域について

この地域は、兵庫県武庫郡本山村という名前でした。武庫郡は非常に範囲が広く、その中の本山村という村の名前で長い間ありましたが、昭和二五（一九五〇）年、神戸市に合併されました。合併するときにこの村、かどういう方向に進むべきか、当時いろいろな意見が出ました。神戸市に合併するか、芦屋市に合併するか、あるいは、付近の本庄・本山・住吉・御影などで集まって一つの甲南市というものをつくったらどうか、という意見もありました。最終的に、神戸市に合併するか否かについて、村民投票を行いました。その投票の結果、僅差ではありましたが、神戸市に合併する票の方が多かったので、神戸市に合併することになり、現在に至っています。

一九五〇年に神戸市に合併された後は、東灘区本山町という名前でしばらく続いていました。この辺りは本山町「野寄」という地名でした。その後、本山町もさらに町名改名されることになり、「野寄」の地名について当時、いろいろ議論されましたが、「野寄」の地名より「西岡本」という地名のほうがよかろう、という意見もあり、「西岡本」という地名になりました。昔の「野寄」はすべて、「西岡本」という地名になりました。「野寄」という名前を残したいという思いから、この建物（本山西地域福祉センター）の二階は「野寄会館」という名前で残しています。このようなことを知らない人が増えていくのでは、と思いますが、やはり地名は残していきたいと思っています。また、この南の山手幹線沿いにお墓がありますが、そのお墓も「野寄墓地」という名称で地名を残しています。

明治の初め頃、住吉川周辺はほとんど畑や田んぼ、という様子でした。非常に人家の少ない、のんびりとした郊外地でした。流れの速い住吉川を利用して、山手のほうで水車産業を盛んに営んでいました。時期は江戸の初めのころから明治の終わりのころまでです。水車の動力を使っていろいろな水車産業をしていましたが、大正の終わり頃から、動力が電気やエンジンに代わり衰退してしまい、もう水車の名残はほとんどなくなってしまいました。本山村で二つ目の小学校として、昭和八（一九三三）年に本山第二小学校ができました。当時は近代的な洒落た建物でした。真っ白な校舎だったので、私はそれが特に印象に残っています。その翌年の昭和九年に私は小学一年生で第二小学校に入学しました。小学校では、楽しく過ごしていました。

二　水害の経験と復旧

昭和一三（一九三八）年に、この付近は住吉川が氾濫し、一週間ほど続きました。大変な雨量でした。山は雨水を受けてふくらんで柔らかくなって、土石流を起こしました。山は崩れてきて、崩れた山が川へ集中して堤防より高くなり、堤防を超えて土石流がザーッと一般の民家の方へおしよせてきました。そして、大きな石がごろごろ流れてきました。水の勢いというものはすさまじいものだと感じました。

いったん転びだすと、どんどん流れてきて、石が積み重なって、川の水があふれ出て、民家の方へと、西へも東へも、流れて、広がっていって、大変な流れになりました。本山第二小学校の南側へザーッと水が流れ込み、小学校のすぐ南側に通っていたJRの列車、が立往生しとまったままで線路はぐちゃぐちゃになりました。さんざんな有様でした。

野寄公園に有備無患「備えあれば憂いなし」と書かれた石碑があります。水害の後、国・県・市が水害復旧について、いろいろな手を尽くし、また個人は個人で自分の屋敷の土砂を取り除いて、元の生活に戻れるようにいろいろ努力しました。そういうことで、その時の記念に、石碑を建てました。その時の村長さんの言葉が碑文として残っています。死者は一二名でした。土石流の流れにおされて、全壊した家屋は七〇〇あまり、埋没、浸水した家屋は一五〇〇棟余りで、とんでもない災害が起こりました。ここには、天皇陛下からお見舞いをいただいて、大変感激した、ということが書かれています。私達が一番感銘を受けたのは、個々の力は小さいけれども、みんなが力を合わせれば、大きな災害から復旧することができたということです。

三　戦争・空襲・終戦・復興の様子

水害の前年、昭和一二年に、日本と中国との間に事変が起こってしまいました。事変というよりは戦争だと思いますが。初めは小さないさかいだったと思いますが、当時の日本の軍隊・国全体の考え方は、非常に強気な面、がありましただから、

PDF Compressor Free Version

あとに引けないという格好で争いがだんだん拡大し、たくさんの日本軍が進出しました。行けば必ず勝てる、という格好でおぞましい勢いで戦争が始まりました。ヨーロッパ諸国は日本が武力で中国を攻める事について快く思っていませんでした。日本がこのような戦争を起こしているうちに、第二次世界大戦へ発展し、アメリカやイギリスを相手に戦争をするようになりました。当時の国情は、軍国一色でした。天皇陛下を中心にし、日本の陸軍・海軍の権力も強く、政治家もその軍部の力を抑えきれず、戦争へ戦争へと、引っ張り出されたような時代でした。この辺りも、村の人たちは戦線が拡大すれば兵隊が必要になってくるので、兵役により徴兵されていきました。出征をするときには、にぎやかにラッパを鳴らしたり、太鼓をたたいたりして、駅まで出征する人を見送りに行きました。

渡辺さん　ご家族提供

敗戦は、夢にも思いませんでした。昭和二〇（一九四五）年の八月当時、全国の主要都市は全部焼け野原になっていました。アメリカの爆撃機による攻撃で、木造家屋が多い日本の家屋は、計画的に絨毯爆撃として焼夷弾をばらまかれました。私も目の当たりにしましたが、焼夷弾は瓦を破って突き刺さり、中の油脂がもれ、なかなか火が消えない構造になっていました。日本の木造民家を攻撃するためによく研究した結果そういうものが有効だろうということで、焼夷弾攻撃というものが使われました。神戸の中心街は、三宮の市役所の建物と山手の方の海洋気象台は焼けていませんでした。それ以外は、JRの線、か一本あるだけで、全部焼け野原で、本当に終戦当時の状態はすさまじいものでした。私から見れば、水害や地震よりも、戦争の被害の方、かすごかったと思います。日本の主要都市のほとんどが焼けてしまい、戦争に負け、連合軍による占領下におかれました。この時代は私たちにとっては灰色の時代でした。方向性を見失ったということが印象に残っています。戦災を、っけて主要都市はほとんど焼け野原になってしまったので、そこに住んでいた人たちは疎開や親戚を頼るなど、生活を何とか維持しようとしていました。ところがその頼るべき家のない人はどうなったのでしょうか。公園の中に掘っ立て小屋を建てて、雨露をしのいだりする人たちもいました。

戦地に出征した人たちは現地で武装解除されて、順次日本へ送り返されてきました。軍隊に行った人はほとんどが働き盛り、元気盛りの人たちが多いわけですから、そのような人たちが順次帰ってきて、そしてそのような人達の力で復興が進みだした、ということです。当時、戦災を受けたからと言って、仮設住宅をたててくれるようなことは全くありませんでした。家を再建したくても材木はなかなか手に入らず、よほど緊急の度合いから配給されていった、というような格好だったので、家を再建するにしてもなかなか難しかったのですが、少しずつではありますけれども、仮設の建設から始まって、なんとか雨露をしのぐような形で少しずつ家が建ちだしました。仮の、板葺きの建物が多かったですね。それからは普通の家を建てられるようになって、普通の木造の二階建ての家が建ちだしたのはもう一〇年ほどたってからだったと思います。

四　高度経済成長と復興事業

高度成長期に入ったころから、少しずつ景気が良くなってきました。当時を考えると、昭和三〇（一九五五）～五〇（一九七五）年あたりが、非常に日本も元気になっていってるような姿だったと思います。だから、今日、神戸市内を眺めてみると、あれだけのビルが隣接していますが、焼け野原と重ね合わせてみると、人間の営みというものは素晴らしい力を持っていると思っています。五〇年も六〇年も過ぎていますが、みなさんが努力をした結果、現在の街並みがあり、あれだけビルが隣接するのだな、と改めて感心しています。

戦争で失うものばかりで、大変でしたが、一つだけよかったと思うことがあります。それは戦災復興事業です。道路整備・区画整備・宅地整備を行い、まち、つくりをするというような内容です。当時私も参加していましたが、五〇メートルの幅員の道路をつくったのです。こんなに広い道路いるのだろうか、と当時は思っていました。せいぜい二〇メートルくらいの道路が良いのではないかと思っていたのですが、今日になってみると、五〇メートルの道路でも狭いくらいで、ものすごい車社会になりました。当時、五〇メートルの幅員にすると考えた人は、かなり先見の明があったのかな、と思います。どこの生活道路も、以前は非常に狭くて　曲がりくねったような道も区画整備され、このあたり一帯も区画整備を行い、ある程度道が整備されました。これが戦争で失われるものばかりの中で少し良かったのかなと思うことです。このような機会を与えられたことが地域にとっ

PDF Compressor Free Version

て良かったと思っています。

戦争の傷跡、かなくなっていったのは昭和五〇年くらい、という感覚があります。しかし本当の意味での戦災からの復興には五〇年くらい時間がかかったと私は思っています。

人間が生活するにおいて平穏で安全であるという時期が続けばよいのですが、思いがけない災害などは起こってしまいます。そのたびに神戸市の人が力を尽くして復興してきたということです。

五■

平成七年の震災のことについて触れてみたいと思います。この地域で地震が起きて、一月一七日朝の五時四六分、まだ暗いうちに、思いがけなく大地震がおこりました。この地震は広範囲に及び、地盤の弱いところは被害もたくさんありました。大別して言うと阪急から上は古くなった家は、倒壊していましたが、比較的大丈夫でした。しかし阪急から南側は水害で土石流が流れた砂地の上に立った家という感じだったので地盤が弱く、ゆさぶられて倒壊する家が多かった。阪急から南側の被害がかなり大きかったのですが、国道一二号線より南はもっとひどかったかもしれません。ものの見事に家がつぶれて、地震が起きて真っ暗な中で何が起きたかわからない。私の家は全くつぶれたわけではなかったので、何とかして暗闇の中をガラスの戸の裂け目から抜け出して、隣の家に声をかけました。真っ暗なかで家がつぶれて閉じ込められて、あちこちの家で声だけが飛び交っていました。特に女性の声は響き渡っていました。それでも、私は二回も大きな災害に遭っていますから、意外と落ち着いていました。

手助けを必要としている人、かいたち、下敷きになっている人たちを助けたり、一階がつぶれて、二階、だけが残っていたりあるいは二階が傾いて二階に住んでいる人が下りるに降りられないというような状態であったので、梯子を持って行って、おろす手伝いをしたり、ずいぶんあの時は訳も分からず走り回っていたと思います。それから、建具がゆがんで出られない人たちもいました。

私は区役所の方へ薄暗いうちに行きましたが、区役所には誰も人がおらず、消防署の前に、ずらっと人の列ができていました。「なんの列ですか」と聞くと、「救助をお願いしに来ています」と。それだけ救助を求めている人が多いということでした。消防署の職員もごくわずかしかいませんでした。これはとうてい間に合わないと思いました。灘区の方を見ると煙が上がっていて、火事が起こっていました。灘区の方までも地震の被害が及んだのだと、その程度のことしかわかりませんでした。テレビもラジオも何もなく何の情報も入らないので、近隣で助け合うしかなかったのです。その辺りも一つの教訓になったと思います。その時その時の生活をどうするか、雨露をしのぐ場所をどうするか、ということで、避難場所として指定されていた本山第二小学校に行った時、当日の朝早くから一〇〇人くらいの人が集まっていました。しかし、小学校の校舎に亀裂がはいって、危険だから使えない、という状態でした。あとから建てた新校舎だけは、何人かの方が収容されていました。当時は、建物の損壊を免れた人の家に身を寄せたり、親戚に疎開したり、小学校・中学校の子供たちは、親戚を頼って転校したりしていました。それから、行政も、本格的に動き出しました。当時の救済の方法は、広い公園などにたくさんの仮設を建てるものでした。しかし、なかなか全員に行き渡るというわけにはいかないので、少し郊外地の方にも、仮設を建てる、ということもありました。仮設はありがたいと思いました。水害や戦争で空襲を受けた時は、仮設をたててやろうということはありませんでした。だからよけいにありがたいと感じました。

それから復興への第一段階として、瓦礫の処理が始まりました。跡地に家を再建するにあたって、瓦礫の処理をしていなかったら、手の付けようがないからです。比較すると、水害の時は屋敷の中に入ってきた土石流は、全部自分たちで道へ放り出さなければならなかったのですが、地震で壊れた時は、公で全部見てくれました。神戸市の瓦礫の処理についてはかなり迅速にやってくれたと私は思います。トラックに瓦礫を積んで、処理場まで行くのに大変な渋滞を続けながら、瓦礫処理者が進んでいきました。瓦礫の処理の申し出をするのに、三宮まで行かなければなりませんでした。なんとかして三宮まで行き、そして、申し込みの順番を待って、瓦礫の処理についての申し込みをしました。私は一〇件くらいの家の処理をまとめて申請することにして、四月ごろにいったのですが、「処理ができるのが七月頃になります」と言われ、瓦礫の処理の見通しについてはなかなか難しい状態でした。でも、比較的速やかにやっていただいたと思っています。

その時すごく感じたことは、戦争からの立ち直りの時は、国は主体性を失っており、家は全部焼かれてしまい、働き者はまだ戦地から帰ってこないという非常に疲弊した状態からの復興でした。だから、戦災復興の時と比べると、今回の震災復興は、全然国力が違い、また機械力などにも雲泥の差があるので、あれだけのいろいろな機械を動員でき、かなり遠いところからも応援に来てくれ

PDF Compressor Free Version

たと思います。だから、復興への第一歩、という様な格好になったと思います。

戦災時の復興状況と比較すると、比較にならないくらい早いスピードで復興したと思います。今日ではほとんど影を観ないような状態まで復興したと思います。特に東灘区が、元の住民の数よりも多くなったのが一番早かったと思います。地震直後にある街をあるいたときには、屋根が全部地べたに落ちて波打って、目線より下に屋根があるという様な街並みをずっと歩いていました。すさまじい事態が起きたわけで、そのことを思いながら今街並みを見ると、大変良かったなと思っています。いろいろな災害が起きたときも、再建に向けて努力をすると、口では簡単に言えますが、当時見通しがすぐに立てられるものでもないし、みんな、それぞれが苦労・苦心していたと思います。まだまだ借金を残している方もいらっしゃるかもしれません。それでも日々の生活の救いとなったのは、周辺の都市からの救援でした。救援物資を乗せた自動車、か山手幹線をずらーっとならんでいました。この辺りは、京都・長岡京市の自動車がたくさんきてくれました。それから、その時一番困ったことは水です。水、かなければ本当に恐怖です。一番早く給水タンクを見かけたのは、本山第二小学校で東京都のタンク車、か早々と水を積んできてくれた時でした。水をすこしずつ分けてもらって、配水してもらいました。この建物は地震では被害はありませんでした。夕方ごろになってここに来た時、ここの人たちがお湯を沸かしてお茶を入れてくれました。そこで初めて暖かいお茶をいただいてほっとしたような記憶があります。

六　防災福祉コミュニティ設立

この地域では地震が起きた後に連帯意識が生まれました。神戸市は、市民の安全を推進するための条例というものを平成一〇年に作りました。その条例を根拠にして、地域で自らを災害から守るための組織をつくる、「防災福祉コミュニティ」という名前です。小学校単位に防災福祉コミュニティを作りました。このコミュニティの組織では、毎年防災訓練を行っています。平成一一年度ごろに、震災の時に閉じ込められた人を救出するためのバールやショベル・毛布、か必要だったという様な意見があったので、このような資機材を資機材庫に保管し、災害が起きたときに使えるようにしようと考えました。資機材庫は、三つの公園の中に配置しました。その三つの公園は甲南大学のすぐ東側にある岡本の長子公園、田中町は本山南中学のすぐ東側に、それから野寄公園です。この野寄公園の一角に、防災の資機材庫を作って、その中に資機材を充実させています。そして毎年小学校の子どもたちにほかの防災施設と合わせて説明することにしています。

七　新住民との関わり

最後に、新しい住民との交流についてお話したいと思います。地震のあと新しくできたマンションは耐震設計や防犯的な設備も整っているので、安心して住めるという理由からそのマンションに来られた人が多いです。だから、防災活動や防犯活動に参加する人が非常に少ないです。本当は高層マンションに住んでいる人たちは、災害が起きて断水になったり電気が途絶えたりしたら困ってしまいます。実際に、震災の最中に、一〇階に住んでいる方が、「一〇階まで水を運ぶのに年寄りばかりで困りますので、なんとか手を貸してくださる人はいらっしゃいませんか」ということもありました。そのような時にボランティアの方々が手伝ったりしてくれたりもしました。

地域住民がいろいろな形で協力しあい、助け合い、人間の生活圏が維持されてきました。古い古い昔から、このようなことが連綿として続いて、いろいろな組織、かいい方向へ目指そうということで、今日まで活動が続いています。

二〇一三年一〇月三一日　編集　丸山哲

野寄公園「有備無患」の碑の前で説明する渡辺さん

PDF Compressor Free

私と地域とのかかわり

本山西ふれあいのまちづくり協議会　委員長
野寄財産区管理会　会長
木下昭満さん（七〇歳代）

―幼少期の思い出について教えてください。

私が生まれたのはこの神社（大日女尊神社）の近くです。遊ぶといいますと、小さい時はあまり遠方には行きませんので、この近所で遊んだり、また神社に広場がありましたので、そこで野球をしたりしていました。この建物（注：地域福祉センター）は当時ありませんでした。また、神社の社殿は昭和三八（一九六三）年に再建されたので（注：社殿は、昭和一三（一九三八）年の大洪水と戦災によって、甚大な被害を受けた）、その間、畑や隣接のブロック会社の資材置き場になっていました。ブランコもありました。子供同士で草野球をやっていました。あるいは路地で石けりや、缶蹴りもしていました。

べったん（キャラクターカード）はご存知でしょうか？今でいうメンコのことです。カードを地面にバーンとたたきつけて、相手のカードをひっくり返したらそれをもらうことができます。自分のべったんにロウを塗って分厚くして、絶対動かないようにみんなが競って作っていました。さらに、地面に三角形を描いてビー玉を並べ、二メートルくらい後ろから狙いを定めてバンとはじいて、当たったビー玉が外に出たらもらえるというような遊びもしていました。また探偵ごっこもしていました。この近所を走り回ったり、かくれんぼのようなことを、小学生のころからやっていました。

夏になれば毎日、住吉川に泳ぎに行きました。堰堤は実際にはあまり高くありませんが、そこから飛び降りるのが怖くて、小さい頃はすごく高いという感じがありました。堰堤の下に水が溜まっていて、水位は今より深かったです。今あるような遊歩道ができる前だったので、川原に石がゴロゴロしていて、歩く足の裏が暑かったです。また耳に水が入った時、熱い石を耳にあてて、そうしたら石が水を吸い取ってくれると思っていたのです。

―実際に効果があるかどうかは分からないのですが―水が耳に入ったら必ず石を耳に当てていたことが思い出として残っています。

ローラースケートもしていました。当然手作りです。引き戸についているコマを板に着けて、板の上に乗って、ゴロゴローっと滑っていました。アスファルトの道が近所になかったのですが、川を渡って住吉の方に行くときれいに舗装された道路があったので、そこへ遠征して遊んでいました。ゴーっと大きな音がするので、楽しかったです。住吉地域は住宅地が多く、豪邸がたくさんありました。野寄の辺りは土・石ころだらけの道でした。

高学年になると、近くの十文字山へ行きました。また、今、ヘルマンハイツと呼ばれている丘の上に、戦前、ドイツ人のヴィクトル・ヘルマンが住んでいた屋敷がありました。それが戦争で焼けたのか不審火で焼けたのか定かではないのですが、当時は焼け跡になっており、そこでよく遊んでいました。また少し年齢が上がってくると、私は絵が好きだったので、山へ登ってスケッチをしていました。その廃墟となったヘルマン屋敷の絵を描いたりもしました。

中学生に上がってからは、空気銃で鳥を撃ちに山に行きました。玉をいれなくても音がバーンと鳴り空気だけが出る仕組みとなっているので、人

木下さん　12月2日撮影

絶好の遊び場だったヘルマン屋敷（当時）

ヘルマンハイツからの展望

PDF Compressor Free Version

に向けると危ないため、学校では禁止されていましたが（笑）。スズメは当てるだけです。それも滅多に当たりませんでした。

―地域活動はいつ頃から始めましたか

地域活動を始めたのは昭和五四（一九七九）年くらいです。約三〇年前に消滅した青年会を同じような年代の者たちで再編しました。神社の行事などは年配者が行っていましたが、そこに我々も参加して教えてもらい行事を通じてコミュニケーションが図られました。この頃より地域の中で色々な役に付かされました。

現在、野寄財産区会会長、本山西地域福祉センターでの本山西ふれあいのまちづくり協議会委員長、野寄区地車保存会会長等々を任されるようになりました。

―だんじりについて教えて下さい

野寄の地車（だんじり）について、今分かっているのは、今の地車が五代目ということです。江戸時代には、一七三〇年代から本住吉神社に宮入りしていたと思われますが、どのようなものであったかはよく分かりません。

大正時代末、地元の名士であった久原房之助氏が村のために新しい地車を購入し、初代の地車を引き取ったと聞いていますが定かではありません。この地車を見に行ったことのある人に聞くと「真っ黒けの汚いだんじりで、前の柱には金網がはってあり、セキセイインコが飼われていた」と、言っていました。新しいだんじりは、河内の方から馬に曳かせて持って帰ってきたそうです。端正なだんじりだったと聞いています。

昭和三年本山西部区画整理組合が設立され、道路の整備が行われたため、道路幅が以前に比べ随分と広くなり、今まで小さなだんじりしか曳くことができなかったのが、道幅が広がったおかげで、大きなだんじりも曳くことができるようになりました。この頃からだんじりのブームが起こりつつあり、各地区が競ってだんじりを新調・購入していきました。そうした中この野寄でも、どこにも負けない大きなだんじりを新調しようということになりました。

そこで当時曳いていただんじりを中野地区に譲渡し、村所有の土地を売って、そのお金をもとに大きなだんじりを新調しました。彫師は富山県井波出身の川原啓秀によるものです。当時啓秀が灘区の脇の浜に工場を持ち、のりにのっていた時期の製作で、代表作もこの時期に集中しています。新しいだんじりは総黒檀（こくたん）のだんじりで、東明地区のだんじりと兄弟だんじりでした。

一本の原木で、東明と野寄の二つのだんじりを造ったそうです。大工は地元、神戸住吉に住む名工、大石巳代吉で、神社の境内で造られました。

昭和八年一一月に完成し、大日女尊（おおひるめのみこと）神社境内で盛大にお披露目が行われました。当時の祭りといえば村中あげての祭りで、本住吉神社へ宮入りをしたら地車を境内に一晩留置きして、翌日伊勢音頭を唄いながら迎えに行ったそうです。

ところが、昭和一三年七月、阪神大水害が野寄地区を襲いました。住吉川が氾濫し、おびただしい量の土砂が流れ込み、大日女尊神社の境内は土砂で埋まり、社務所も大きな被害を受けました。新調間もない地車も埋もれてしまいましたが、後日もとの場所にみんなの力で戻しました。復興までにはかなりの年月がかかり、祭りができるようになった頃には、既に風雲急を告げ、逆に祭りどころではなくなっていました。

終戦も間近い昭和二〇年八月五日（日）、B29の大編隊が阪神間の都市を襲いました。神社付近も大きな被害を受け、神社から神社の北東にかけて多くの家が焼けてしまいました。そして不運にも神社に落ちた一発の焼夷弾が地車小屋に命中し、新調間もない地車も灰燼に帰してしまったのです。

その後しばらくは森地区や弓場地区、芦屋の打出地区のだんじりを借りて曳いていましたが、昭和三〇年に打出の地車を借りたのが最後となり、その後は地車が曳かれなくなりました。

地車が、曳かれなくなって二九年後の昭和五九年に「地車のある無しに関係なく、本山の人たちは仲良くやっていこう」ということで、各地区の青年会を中心に本山連合青年会が設立されました。だんじり祭りがある時は、野寄の青年会は雑踏警備に立ち、協力しましたが、自分たちの地区だけに地車がなく、地車を曳けないということには一抹の寂しさがありました。

それで、どうしても地車を曳きたいという若者たちは、田中地区へ行っていました。

「野寄にも地車が欲しい」

そう考えた私たちは、昭和六〇年五月のとある日、自分たちで地車を造ろうという事になりました。幸いメンバーの中には大工さんや鉄工所経営者など腕に覚えのある人がいて、全くの素人集団ではなかったのです。

まず他地区の地車を参考にしながら、どんな地車を造っていくかを話し合いました。そして、材料を買い、設計図を描き、木を切っていきました。とりわけ難しかったのが破風（はふ）で、曲線に切っていくことがなかなかできません。欄間（らんま）にしてもちょっとくり抜く程度ならできる

PDF Compressor Free

のですが、それ以上となるとなかなか大変でした。昔の地車のイメージで作っていましたが、当時は昔の地車の写真がなかなか出てこず、厳しい状況の中での製作でした。また、地車の勉強にと、日曜日ごとに車をつらね、大勢で大阪や淡路島に出かけ、入れ替り立ち替り見学してきました。

こうした地道な作業が一年近くも続く中、村の長老たちは「結局できたとしても、他の地区の本式の地車とは比べ物にならないだろう。みんなの熱意は痛いほどよく分かった。地区として地車を購入しよう」ということで意見が一致し、みんなに地車を探して来るよう言われました。地車製作のために結成された「野寄区地車準備会」を中心に寄付金を募るなど、新しいだんじりの購入に備えていきました。地域住民からの寄付金と野寄財産区管理会からの支援金加え、購入資金としました。

昭和六一年、大阪の太鼓正よりだんじりを購入しました。この年の一二月一四日に地域住民や関係者が集い、盛大にだんじりのお披露目をしました。

そして翌年昭和六二年、町曳き、宮入りがついに復活しました。今年は地車祭りが復興して三〇周年になります。またこの年より、野寄の地車復活が契機となって行われるようになった「本山八地区山手幹線だんじりパレード」にも参加するようになりました。

その後大改修を三度行いました。まず昭和六三年に屋根を改修し、擬宝珠（ぎぼし）匂欄（こうらん）を刎（はね）匂欄に替えました。平成二年には、啓秀の孫である川原和夫師に鬼板を発注しました。高井宗官さん所有の樟（くすのき）が切られるというのでお願いにあがり、この樟から、鬼板三枚を彫り、翌平成三年に付け替えました。

二度目の改修は平成五年に行い、彫刻と錺（かざり）金具だけを残して解体。全体を一回り大きくしました。さらに土呂台（どろだい）・虹梁（こうりょう）・木鼻（きばな）の彫刻を川原一門に発注し付け替えるとともに、同じく川原和夫一門に新たに拝懸魚（おがみげぎょ）・降懸魚（くだりげぎょ）を依頼し、平成七年と八年に付け替えました。

三度目の改修は、平成一六年から二年間かけて全て解体し、土呂台から上部を新しくしました。屋根や柱を改修し、彫刻は、他地区の地車には見られない野寄地域ゆかりの古跡及び近隣の風景を取り入れた彫刻に入れ替えました。野寄の地車の自慢の一つに昼提灯があります。これは、神話、武将、童話を中心に八個つけられており、人々の目を楽しませてくれます。

平成九年には新しく地車小屋を作りました。旧

の地車小屋は、もともと地車製作の作業場的要素が強かったのですが、新しい地車小屋は、地車の収納を第一とし、広さにゆとりを持って作られました。

平成一一年には、大鼓（口径二尺五寸）を新調しました。昔から野寄地区の鳴り物は、「太鼓の音神の好む音」と言われ、大太鼓でゆったりとしたテンポが大きな特徴です。

野寄の地車は、地域の伝統文化財であり、団結の象徴でもあります。これからその伝統文化を、若い人達に引き継いで行って欲しいと願うばかりです。

―地車保存会の会長になったきっかけは何ですか？

会長になったのは、平成一六年から現在に至っています。日頃地車に関して熱心だったからだと思います。地車祭は、早くから準備をしなくてはならないので、巡行コースの作成など一手に引き受けていたことも一因ではないでしょうか。

―木下さんから見た野寄のいいところは何ですか？

私は、十文字山からの眺めが大変好きです。野寄地域が一望できます。遠く大阪湾から和歌山辺りまで見渡され小さい頃は見渡せば田畑ばかり、魚崎浜も手じかに見え何も遮られるものも無く、のどかな光景でした。

現在は、住宅街として洒落たマンションやお洒落な住宅が多く増え住み良い街に替り関西に誇る住宅街に変貌しつつあります。野寄地区は何かにつけて各種団体の横の繋がりが良くて、自主的に街中をボランティアで掃除や防犯パトロール等を地道にやってくれています。頭の下がる思いです。

また、本山第二小学校に野寄地区（西岡本）から通う児童が一〇〇％在籍しており、だんじり祭り等の行事に沢山参加してくれています。挨拶ができる子ども達が多いのが嬉しいですね。

―これからの野寄について

この地域には、自治会がありません。各町に自治会を作る話が有り、まず四丁目の自治会ができましたが、二年余りで自然的に解散してしまい、その他の区域もできませんでした。地域には、財産区、ふれあいのまちづくり協議会、老人会、婦

PDF Compressor Free Version

人会、青年会等の各種団体があり、横のつながりがしっかりしているため、自治会の必要性が無かったのです。

これからも各種団体の協力の元で明るく住み良い街を目指して行きたいと思っています。

現在、この地域の歴史を皆さんに知って頂こうと財産区管理会で、仮称「野寄村誌」を執筆中です。完成すれば皆様にお知らせしますので、是非ご期待ください。

取材日　二〇一六年　一一月一〇日
　　一二月一日
編集　野上黎吏

12月2日撮影
上段中央が木下さん ほかゼミ生

だんじり祭りに参加する若中、小若、世話人、賄いの皆さん

PDF Compressor Free Version

私が生きた野寄と歴史

坂本武士さん（四〇歳代）

一　だんじり

昭和二〇年、戦争の空襲により焼失したため、野寄にはだんじりがなかったのですが、今から三〇年ほど前、私が中学校一年生の頃に地域の人々が力を合わせて復活させました。

復活の際、地域の先輩方は自分達の手でだんじりを造ろうと考え、実際に作業小屋まで建てて試行錯誤していたそうですが、なかなか難しく、それを見かねた当時の長老が、その熱意を認め、だんじりを購入することが決定したと伺っています。今やだんじりは老若男女を問わず、地域の人々を繋げるコミュニケーションツールの核となっています。毎年五月四・五日に行われる、だんじり祭りの準備は、年明けすぐから始めます。事故や怪我がなく、楽しい祭りができるように、運行コースや時間など、こと細かに打ち合わせをしています。

また、だんじり祭り当日は地域の宝である沢山の子どもたちが参加してくれています。個人的には、小学校での行事などに地域の方々が積極的に参加し、良い関係を築いているから、親御さんも安心して「曳いておいで」と、言っていただけるのではないかと思っています。最近では、参加する子どもが多すぎて、だんじりの子供用ロープが足りなくなるという嬉しい悩みも出てきています。

野寄のだんじりが復活するまで、他地区の同級生たちが自分の地区でだんじりを曳いているのが羨ましく、復活して自分の地区にだんじりがあり、曳けるようになったことが一番の喜びでした。

復活から三〇年が経ち、野寄にだんじりがあることが当たり前となってきています。先人の方の、だんじりに対する熱い思いを若い世代に伝えていければと考えています。

PDF Compressor Free Version

坂本さん　11月17日撮影

盆踊り大会30周年記念　平成21年

本山第二小学校　ログハウス

二　盆踊り

盆踊りは、子どもたちにとって、夏の楽しい思い出となるように、地域の理解と協力を得ながら、青年会の主催行事として、野寄公園で八月に毎年行っています。昔から、来てくれた子どもたち全員にアイスクリームを配っているので、私も子どもの頃は、それが楽しみだったことをよく覚えています。今は配る側となって、子どもたちの喜ぶ顔を見ることが出来て嬉しく思っています。私は、野寄青年会にも所属しており、住吉川クリーン作戦などの色々な地域活動に参加させていただいています。他にも、大日女尊神社の秋祭り、防災訓練、そして年の瀬には年末特別警戒として、拍子木をもって地域内をパトロールしています。大晦日には新年を迎えるにあたり、大日女尊神社で薪を焚き、神様を迎える「福火」という行事のお手伝いもさせていただいています。

青年会って??

「青年会とは、地域の祭礼に関する協賛、スポーツその他の活動を通じて地域社会の健全なる発展を目指し、会員相互の親睦と意思の疎通を計りながら積極的に地域活動に参加する事を目的とする団体です。

（野寄青年会ホームページより）

三　子どもの頃の思い出

小学生の頃は甲南大学の裏山などに友達と探検に行くことが日課でした。見つけた野池で天然記念物のモリアオガエルに遭遇したこともあります。当時は住吉川、か護岸されていなかったこともあり、沢山の生き物が棲息していました。川の中に入り大きなモクズガニを捕まえたりしたことが楽しかった思い出です。

四　野寄について

「都会の中の村」という位置づけだと思っています。最近では新しいマンションや戸建ても増えていますので、地域のことを知らない方が多いと思いますが、新しく住民になられた方々にも、どんどん地域行事に参加していただけるように、私も微力ながら懸け橋となり、地域のつながりで、子どもたちが安全で住みやすい町であり続ければ良いと思っています。

五　震災について

当時は大学生で、幸い家族は無事でしたが、自宅が一部損壊してしまいました。震災発生当日の夜は野寄会館に避難しましたが、とても人が多く、入ることが出来ず、自宅が倒壊するのではと、車で寝泊まりしたことを覚えています。野寄公園はテント村となり、私の母校である本山第一二小学校も避難所になっていました。現在、本山第一二小学校には震災資料館としてログハウスが建っています。震災後に群馬県の会社から寄付を受けて、神戸市内の六校園にログハウスが建てられました。時が経ち老朽化や諸事情で他のログハウスが無くなっていくなか、今も残っているのは本山第二小学校のみで、それを保存するために学校開放運営委員会の中に震災資料館保存委員会が立ち上がり、私はその委員長をさせていただいています。ログハウスには、震災で亡くなった四名の児童の遺影とともに、当時の貴重な資料、そして各地から送られてきた励ましの手紙や寄せ書きなどが展示してあります。それらの貴重な資料は劣化していくため、どう残していくかを保存委員会と学校で連携しながら考えているところです。普段は一般公開されていませんが、毎年一月の震災メモリアルウィークの時にログハウスが開放され、見学ができる日がありますので、是非とも足を運んでみてください。

取材日　二〇一八年一月一七日

編集　福留一毅

PDF Compressor Free Version

引き継がれる村、野寄

一　昔の野寄

―子供の頃やだんじりのことについて聞かせていただけますか？

小学校低学年の頃は、この辺には空き地がいっぱいあったので、三人か四人くらい集まったら三角ベスやったり、甲南大学の西校舎のグラウンドで野球をやったりして遊んでいましたね。

それと、野寄の上の方に甲南大学のプールがあったので、水泳部の練習が終わってからよく泳がせてもらっていました。

甲南大学の本校舎のグランドにも遊びに行っていました。大学のサッカー部、かボルを仕舞わずにグランドに置いたままにしていたので、中学の帰りにそれを蹴って帰ったりしていました（笑）。

―今では、運動部は六甲アイランドで部活をしていますけど、当時はこっちでやっていたんでしょうか。

そうですね、当時は今ほど校舎が建っていなかったのでグランドもあって広々としていて、そこで子供らも遊んでた、遊ばしてもらっていたという感じです。

遊びというと、よく住吉川にカエルとか水生昆虫とかを捕りに行って遊んでました。ここの住吉川にはカジカガエルという声の綺麗なカエルがいたので、それをよく捕っていました。

その時は今みたいな遊歩道はなくて、川には大小の石がたくさん転がっていて、水中の石には苔が生えてつるっと滑るような感じでしたね。石をひっくりかえしたらカエルの卵がいっぱいあったり。ただ、上流の方には河川敷に家が建ってまして、その辺から汚水とか石鹸とかを垂れ流しにしていたので、水は今より汚かったですね。だけど、ヤゴとかゲンゴロウとか、水生昆虫はたくさんいました。今はもうそんな昆虫はあんまりいないですね、魚は泳いでますけれども。

―当時川で魚はとらなかったのですか？

魚はいましたけど、素早いから子供では捕れなかったです。赤い斑点のついた魚とか鰻とか、鰻は大人が夜中に仕掛けを張って捕っていました。ほかには大きなズガニもおりましたね。

それと悪い遊びといったら、今は売ってないですけどドンパンというのがありまして、それを川の中で投げ合って手榴弾遊びをしていました。

二　だんじり

―だんじりが初めて野寄に来たとき、何か感じることはありましたか？

子供の頃には、住吉のだんじり祭りによく連れて行ってもらっていたんですけど、昔の住吉のだんじりは黒くて汚く見えたのと、霊柩車みたいだったので、子供の頃はあまり好きじゃなかったんです。住吉神社の夜店に行くのが好きというわけではなかったですね。

初めて野寄にだんじりが来たときはすごくうれしかったです。すごくうれしかったですけど、少し小さかったのと、中古だったので彫刻なんか、かもうひとつかなという印象でした。その後、一回ほど大改修して、綺麗で大きな今の形になりました。

だんじりの影響もあってか、盆踊りも次第に規模が大きくなってきましたね。地域としてみんなで盛り上げていこうとなったきっかけがだんじりだったと思います。

三　舩引さんの想い

―周辺地域の特徴について、舩引さんが個人的に思われていることはありますか？

昔からここらへん、自分たちの地域のことを「村」といっているんですよ。できるだけそういう関係は残していきたいなと思いますね。交流が少しでも盛んになって、顔見知りに会ったらあいさつできるような関係が増えればいいなと考えています。

あと、盆踊りもだんじり祭りも、住民全員から

舩引泰造さん（六〇歳代）

PDF Compressor Free Version

ではないですけど地域の皆様にご祝儀をいただいて運営をしているんですが 楽しい盆踊りだ、いいお祭りだということになれば ファンも増えてくれるんじゃないかと思ってます だんじり祭りではお弁当や子供さんのお菓子を配ったりもしていますので 喜んでくれる大人の方や子供さんもおられると思いますし そういう事を通じてでも皆との関わりが増えればいいかなと思っています 。

―そういうコミュニケーションや関わりが持てるという意味で村ということでしょうか？

舩引さん　11月24日撮影

そういうことですね、昔は人口が少なかったのでどこのだれかということも今よりもっと把握できたかと思います 野寄村で困るのが お店が少ないということなんですね 岡本は駅の方に行ったら店がたくさんありますけれども 西岡本の方は酒屋さんとタバコ屋さん二軒くらいですかね。ご飯を食べに行こう飲みに行こうといってもお店が近くにないんですね そのような意味では不便といえば不便ですけど そのかわり車も少ないですし、ゆったりしてるのがいいところですかね。

―最後に、この野寄地域がどのようになってほしいかという舩引さんの思いを教えてください 。

祭りなどの伝統はこのまま若い人に引き継いでいってもらって さっき言ったような「村 」の状態を今後も続けていってほしいですね それがこの野寄での行政の言う「安心安全なまちづくり 」の 一つかなと思ってます 。

―そういう地域やコミュニケーションを繋いでいって 今の状態をしっかり残すということですか？

そうですね 。

取材日　二〇一八年　一一月二四日

編集　村上雄一

PDF Compressor Free Version

野寄地域での子どもの頃の思い出について教えてください

藤本圭子さん（五〇歳代）

子どもの頃は野寄の公園に行ったり友達の家で遊んだり、また公園だけではなく当時は車の通りが少なかったので家の前の道で男の子とは三角ベースボールをしたりとか家の中でままごとをしていました。この上の山は登ることができたので、そこから山登りもしていました。この地域は畑や田んぼ、空地があり、道で遊んでいて車が来ても、ちょっとよけるだけでよかったので、自分の家の前や路地に入ったりと遊び場は多かったです。

小学校の頃は、私たちは「ていきゅう」って呼んでいる遊びをしました。自分の陣地の地面にワンバンさせて相手の陣地に入れるというルールで、大きなドッジボールを使用したボール遊びが小学校の頃によく流行っていました。他の地域では呼び方、か違っていたようで裏大四人ぐらいで四角を書いて各陣地に順位を一番から四番まで決めて、勝っていったら順位、か上がっていく。勝てば上がっていって、負ければ下がっていく。最後は見物人になって、次に負けた人と見物人が交代する遊びを五年六年の頃よくやっていました。位を元、大、中、小って決めている地域もあり、学校でこの遊びをよくしていました。

私が子どもの頃は住吉川で遊べませんでした。ちょうど小学校の頃埋め立てをしていたので住吉川には入ってはいけないという時期でした。多くのダンプカーが通って（注：現在の遊歩道は当時ダンプ道だった）、山の土を海辺のほうに運んでいました（注：六甲アイランドの埋め立て）。なので、住吉川で遊んだ思い出は全くなく、私の子供を川で遊ばせることができた時に自然の中でめだかを捕ったりしている姿を見てすごくうれしかったです。私が子供の時は川が身近に感じなかったので、子供が川で遊んでいることは感動しました。

PDF Compressor Free Version

―地域住民とのかかわりについて教えてください

私は、学校開放の委員として本山第二小学校と関わらせてもらっているので、PTAの方や役員の方とはコミュニケーションをとれていると思います。本山第一二小学校をお借りして青少年育成協議会の人たちが子どもたちにむけてファミリー運動会を開いた時には、私は子育てコミュニティという団体として青少協のお手伝いをしました。豚汁の炊き出しをして皆さんに食べてもらっています。また、一二月には学校開放として餅つき大会をしています。そのような活動を通して、子どもたちや保護者の方と少しはコミュニケーションをとれているのかなと思います。

現在、この地区はだんじりなども活発に活動していて、様々な方とコミュニケーションをとる機会があると思います。私の子供も幼い頃からだんじりに参加し、友達とだんじりを曳いていますし、それによって保護者同士もコミュニケーションをとれると思います。地域の祭りや触れ合いがあることで、私の子供が地域の人に声をかけてもらえるということはとてもありがたいです。もともと私が生まれた時から野寄は温かい町で、みんなが見守ってくれる温かな「村的な」所のようで、おばちゃんやおじちゃんが、「○○ちゃん、どこいくん？」といったように声をかけてくれる。そういうものが野寄には残ったままで、そういう意味でいい形の「村的な」地域だと思いますし、それの核となるのが祭りなのかもしれません。

―野寄から西岡本に地名が変わった時はどう思われましたか？

「野寄」から「西岡本」に地名が変わったのは、私が高校生か大学生の時だったと思います。地名が変わる前、中学校や高校の頃は住所を言うのが恥ずかしかったです。普通はだいだい「○○町○丁目：.」だと思いますでも私の住所は「本山町野寄字仏天垣」でした。中学校に入学して、この住所を言うと、違う地域に住んでいた友達に「これどこ？」って言われました。小学校までは全員ほとんど同じ住所で、他には「仏天垣」ではなく「高井」「手崎」といった住所の人もいたので住所が変だと思ってなかったです。でも、中学の友達はだいたい「○○町○丁目○番地○号」なので、「自分の住所漢字ばっかりやん」って思い、変わった住所って言われるのがすごくショックで、それが恥ずかしいと思った記憶があります。だから地名が変わった時、野寄っていう名前がなくなるこ

藤本さん　11月26日撮影

―阪神淡路大震災時の状況や、地域での活動について教えてください

阪神淡路大震災の時に家が全壊してしまい、娘を亡くしました（注：本山第一二小学校では四人の児童が亡くなった）。その時は、娘が助かるように病院を求めて必死に車を走らせましたが、叶いませんでした。そのあと辛い気持ちを紛らわせようと、私は本山第二小学校でボランティアをさせていただきました。学校側との窓口や避難してきた方のフォローをしました。それが夏ごろまで続きました。六月頃までは毎日学校に行っていました。夏休み明けからは子供たちに教育の場を返そうということになり、避難所は少しずつ小さくなっていきました。二学期からはほぼ全部明け渡しました。その頃、自分の店（寺田商店）も少しずつ復旧してきたので、店を開けました。その当時、福祉センターは避難所として指定されてなかったと思います。阪神淡路大震災があってから、福祉センターの大切さを実感し、福祉センターができたように思います。福祉センターにはだんじりの時や会合があるときなどに顔を出しています。

―だんじりとのかかわりについて教えてください

子どもの頃、野寄にはだんじりがなかったのですが、岡本の地域にはだんじりがあったので、そっちについていく、寄せてもらうような感じで祭りに参加していました。野寄にだんじりが来たのは私が子供を持ってからでした。私の子供はだんじりが大好きで、鳴り物をさせてもらったりしています。私は、私の子供が小学校一年生の時に、まかないとしても参加するようになり、毎年五月の一二四、五日と参加しています。だんだん私たちも年を重ねてきているので、若い人たちに参加してもらえればと思います。

PDF Compressor Free Version

とはショックでした。しかし、それと同時に私たちもやっと「〇〇町〇丁目…」っていう住所になったっていう、うれしい気持ちもありました。ただ、「西岡本」っていう名前は客観的に場所がわかりやすくていいが、私は「野寄〇丁目…」でもよかったのではと思いました。

―野寄のいいところは何ですか？

野寄のいいところは、やっぱり子供たちを自然と見守ることができること、だんじりや七夕祭りにはたくさんの子どもが集まり参加するので顔を覚えることができて、少しずつ親しくなって話ができるといったように、町ぐるみ村ぐるみでみんなが見守っていけるところが素敵だと思います。

取材日　二〇一六年　一月二六日
編集　野上拓希

「震災18年　震災のつどい」 遺族代表　藤本圭子さん　平成25年　1月17日

PDF Compressor Free Version

大正から平成、野寄の歴史と私の記憶

高井史郎さん（八〇歳代）

一　懐かしい野寄

昔、野寄近辺の人々は住吉川を利用して素麺を作ったり、御影石を採取して加工したり、また、六甲山麓では数多くの水車が連なり、それ等を生業にしていた。後に、海沿いでは酒造業が発達し、そういう産業にからんだ仕事が多かったので、野寄は比較的恵まれた場所であったと聞いている。今の西岡本二丁目付近には鉄工所、交番、料理屋、寿司屋、理髪店、路地に入ると銭湯、その先にはカフェが、と活気に溢れていた。夏には、夜店が出るほどにぎやかだった。銭湯の帰りにカフェに寄る。カフェには、アップル水、ミルクコーヒー、サイダー、かき氷に色のついたシロップをかけて楽しんだ。夕方には道路に水を撒き、床几台を持ち出して、世間話をしたり、花火を楽しんだりした。そんな時間が夜中まで続いた。

私は、昭和一二年生まれで物心つく五歳くらいから戦争が始まり、生活が大変厳しくなって、こうした風景も段々と様変わりした。にぎやかだった店も減り、密であった住民同士の交流も薄れ、それまでは、隣保で米を借りたり、味噌を借りたり、そうした親密な日常生活の環境が崩壊してしまった。戦災から逃れるために疎開をする人もあり、生活模様の一変してしまった。子供の頃は、「あの人はあそこに住んでいる人や。何処から嫁に来た人で、ご主人は何処へ勤めておられて、子供は何人いるか。」みんな分かっていた。それ、かもう全く分からなくなった。にぎやかな場所であったのが、年月が過ぎて今の姿になった。当時を振り返る時、何故そんなにぎやかでだったのか、子供であった私にはよく分からない。しかし、大正から昭和の初期には、野寄はそんな華やかなところでもあった。

PDF Compressor Free Version

大正時代の久原橋と久原邸　（甲南学園所蔵）

髙井さん　11月30日撮影

久原邸から二楽荘を望む　（甲南学園所蔵）

二　久原房之助と祖父

大正の始め頃、久原房之助（注：久原財閥の創始者）という人が、大阪から野寄の地へ屋敷を移した（注：現在のオーキッドコートの辺り）。ちなみに、平生釟三郎氏が甲南大学を創設する時に、協力したのも久原氏であった。祖父は、久原氏の屋敷をまとめるという役に就いていた。房之助氏の息子さんと父は、乳兄弟であった。だから、房之助氏との関係については、祖父母からよく聞いていた。そのころについて、あぁ昔そういうことがあったんだということを時々思い出している。

房之助氏は、藤田男爵の甥にあたる人で、奥さんは平野の有馬道の祇園さん（注：平野祇園神社。平清盛が福原に住んでいた頃、祇園神社で大輪田泊の構想を練ったという）の真下におられた田村市郎さん宅の娘さんが久原家へ嫁いでこられた。房之助氏は、叔父である藤田男爵の銅鉱山へ番頭として勤めていた時、藤田男爵が、もうこの山はあまり鉱石、かでないから閉山すると決めたので、番頭をしていた房之助が「それなら私に譲ってほしい。」と頼んで銅鉱山を譲り受けた。その後、岩盤が崩れて銅鉱脈が露出した。それが久原財閥（注：現在の日産、日立、ＪＸの源）の始まりであった。久原家の屋敷は大きく、今の灘高校の辺りから野寄のお墓の辺りまでの広さがあり、上女中、下女中が一〇〇人ぐらい働いていたそうだ。

灘高校の辺りには子供の電車が走り、小動物園、桃畑、遊園地には子供の電車が走り、小動物園、桃畑、西瓜畑が点在し、屋敷内では松露も採れたそうだ。私の父は、その発電所の助手を勤めながら電気の知識を見よう見真似で会得し、その後電気工事の商店を開業した。

少し経った頃、房之助氏の東京への転宅が決まり、その息子さんが一緒に行こうと父を誘ってもらった。乳兄弟であったから誘ってくれたらしいが、それを断って、そのまま祖父も父も久原家とは段々疎遠になった。疎遠になってしまったが、一途に思っていた祖父は自分の危篤時、房之助氏から元気にしているかと電話があったと耳元で言った時、はっと目を開けた。起き上がろうとした。身も心も入れて務めていたのでだろう。当時、奉公することに対して一生懸命であった祖父だと思う。

大金持ちは、一体どういった生活を送っていたのだろうか。こんな話を聞いたことがある。あの時代には、まだ冷房装置は無く、夏はとても暑かった。房之助氏は、母のために山から水を床下に導き、その冷気を座敷の四隅の簀の子から吹き出るよう、仕掛けを作った。まさに自然が作る冷房だ。大変大掛かりでお金もかかるが、あの時代にそのようなことが出来た。今、世界中で貧富の差が問題になっているけれど、当時はどのような思いで大金持ちを見ていたのか、少し気になってしまう。貧富の差どころでない、アメリカンドリームでないけれど、そんなことが日本であった時代がある。久原邸では、村民に屋敷を開放し、宴游会を開いたり、昭和初期に野寄村へだんじりを寄付したり、また、村に眼病が流行した時、村内の数か所に井戸を掘って村民の衛生について心配したり、何故そこまで村に、その住民に、久原氏が貢献したのか。私は世代が違うから想像がつかない。財閥のお屋敷があったことで、たくさんの雇用が生まれた。そして、野寄地区が潤ったのも事実のようだ。

三　戦争と野寄

戦争時は、久原邸の跡地に川崎重工の典型的な二階建ての木造の社宅が規則正しく並んで建っていた。それを目がけてＢ-29（注：米軍の爆撃機の名）が焼夷弾を落としに来た。多く建っていた社宅は全焼し、焼夷弾が風で煽られて近隣の家まで焼けてしまった。私は、空襲警報、が鳴ると阪急の線路の下の隧道に身を潜めてじっと飛行機が通り過ぎるのを待っていた。当時は、どの家も深さ六〇センチメートルほどの防火用の水槽をモルタル

PDF Compressor Free Version

で作り、その水をすくい、火を消すというのが使命だった（注：消火訓練。当時、避難訓練よりも、空襲による火災をバケツリレーで消火する訓練が行われた。）。学校では授業中、空襲警報が鳴れば、みんな自分の荷物を持って家に帰ってしまう。空襲警報解除の声が聞こえれば、また学校へ行く。席に着くと、隣にいたクラスメイトがいない。誰かが空襲で死んだ。話はそれで終わる。今であれば血の気が引くかもしれないが、当時はもう慣れてしまっている。だから、焼夷弾が落ちて亡くなってしまっている人が横にあっても見向きもしない。

野寄には、焼夷弾、が落ちてきたが、国道二号線から南側は、石綿工場や、帆布工場、飛行機を作っている川西航空機等、町工場がたくさんあった。こういうところへは焼夷弾ではなく、爆弾による空襲と使い分けているようだ。甲南市場付近では、爆弾が落ちた跡に一五メートルくらいの孔が点々とあった。そこに元々あった建物や土は、どこへ飛んだか分からない。どのようにして作ったのかと思うほど、綺麗なすり鉢状だった。

焼夷弾は、長さ六〇センチメートルくらいの六角状の筒にゼリー状の油が入っており、その先に着火した布状の帯が付いていて、落下すると油に引火して爆発する。そして、一〇メートル四方に弾ける。それ故に、木造家屋は全て焼けてしまった。バケツで水をすくい、持って行ってたとしても、それは何の役にも立たない。ましてや、自分の身を守ることが最優先であるから、防空壕の中で身を隠していた。空襲警報が解除されて、外に出る時には既に辺りは燃えてしまっている。

グラマン（注：米軍の戦闘機の名）に襲われたこともあった。焼夷弾を積んだ飛行機、が先に来て、空襲警報が解除されたのを見計らって、次にグラマンがやってくる。それから人を襲う。動く白いものが標的にされているから、白いシャツを着ていると狙われる。私は、国道二号線の住吉川の橋の下へ逃げ込み助かった。撃たれた痕跡には湯気が出ていた。

神戸には、三回ほど空襲があった。本山第二小学校は、一学年百数人であったけれど、その間に四、五人亡くなった。友達が亡くなったから悲しんでどうとか、思い出してどうとか、そのような余裕は全くない。人間性が亡くなってしまっている。本当に寂しい悲しい時代であった。二度とあってはならない経験である。

四　阪神淡路大震災と野寄

震災の時も戦争当時と同様で、二、三人亡くなっても、「あの人亡くなったって。」と他人事のようだったが、言葉を交わした人や子供たちの姿を思い出すと、今から始まる永い幸せな人生があったことだろうと胸が痛む。

地震から二日くらい経った時に、「あの人どこの人だったかな。」と出勤のタイミングで会えば会釈する程度の関係だった男性を思い出した。家屋は崩れている。声をかけても当然ながら返事はない。消防を呼び、捜索すると、男性が横になって寝ていた。でも、その時既に息をしていなかった。が、まだ体温は残っていた。もう早く気が付けば、親しくお隣同士の付き合いをしていれば助かったのかもしれない。近所の付き合いも大事だとつくづく思った。

遺体は、安置所に集められていた。この辺りは、魚崎の小学校が安置所になっていた。教室に行ったら遺体がずらっと並べられている。四〇体数えて、あとは数えられなかった。二日に一度くらい検死というものがあって、この人は窒息で亡くなった、この人は出血で亡くなった、など検視官の医師、か死因を特定しない限りその人は死んだことにはならない。火葬もできない。その後、死亡診断証明書をくれる。それを持って区役所へ行けば火葬証明書をもらえる。その火葬証明書があれば、日本国内の何処の火葬場へ行っても火葬してもらえる。しかし、この辺りの火葬場は、二日くらい並んで待つ予約がパンク状態にあった。

その後、私は救出しても御棺がないことに気が付いた。急遽ベニヤ板で御棺を作ろうとしたが、これが難しい。寸法をいくらにすればいいのか分からない。三〇センチメートルでいいのか四〇センチメートルでいいのか分からない。なので、火葬場に知人を通じて確かめたが、「大きくしたら入らへんでー。」という一言だけだった。震災、か起きれば、どんなことが起こるか分からない。難しい思いもする。

本山第二小学校が避難場所になった。京都三重方面から応援に来た人たちは食料をトラックに積んで支援に来られた。野寄は、比較的六甲山に近いから、六甲越えであればこの辺りの渋滞した道路を通らなくても来ることが出来る。だから、トラックで応援に来てくれる人が多かった。改めて人の情に手を合わせる。

今でもお盆に墓で知り合いに会えば、「生きていたらな、こんな年になっていたな。」と話をする。亡くなった人には気の毒で、言葉が無い。まさに災難そのものだ。

PDF Compressor Free Version

五　だんじりと野寄

昭和二〇年頃、戦時中にだんじりは焼けてしまった。野寄には、石工や牛に酒米を積んで運ぶ馬力引き等、力仕事をする人が多かった。だから、野寄のだんじりは、比較的大きく重いものだった。しかし、それが無くなってしまった。

昭和二五年のときに、本山村は神戸市と合併した。神戸市は、我々は同じ市民だということで、花電車を飾って一体感をアピールした。我々はそれに応えるため、神戸市の港まつりに合わせて、トラックをベニヤ板で囲い、それに電飾したものを作ったこともあった。

その当時、近隣地区のだんじりを借りて地区内を巡行していた。岡本にはだんじりがあったことから、羨ましい気持ちもあった。何とかしようと、待望のだんじりを手に入れ、何度も手を加え、熱心な多くの人たちの努力があって今の状態になった。皆、かだんじりに憧れを持ち、思い入れが強かったから、今のような野寄のだんじりができたのだと思う。

野寄のだんじりは、曳く人の人数が多い。と同時に平均年齢が若い。今の役職の人たちは、できるだけ若い人たちを中心に活動するようにしている。経験があろうが無かろうが、次世代に繋ぐために、先輩の人たちは若い人を中心にだんじり祭りを盛り上げるようにしている。しかし、事故があったら大変、締めるとこは締める。これが野寄の特徴だと思う。

野寄では、今でもだんじりを引く人たちが溢れている。少々重いだんじりでも別にどうということはない。子供たちも多く、ロープも一本では足りないから、二本継いで参加意欲を汲み取る。ありがたい話だと思う。村中みんなが楽しみにしている。思い入れの強いだんじりを豪華にしたり、保存したりといったことに努力し、大事にしなければと力を入れている。だんじりが無いときの寂しさが身に沁みているのか、愛着や思い入れが強い。だから、毎年盛大にだんじりを出すことができる。今となっては、焼けて寂しい思いをしたそのことも無ではなかったとも思う。

六　最後に

子供のころを振り返れば、今の野寄は静かな住宅街、だと思ってしまう。がこれは時代の流れである。八〇歳にもなって、昔のことを思い出して懐かしんでいたって、まさに今、スピードの早い時代が流れているから、それはしっかり自分で心得て受け入れないといけない。それでも道路を通ってる人がみんな知らん人ばっかりやったら、寂しすぎる気もする。今となっては、懐かしさで物言うんじゃなしに、野寄をもう少しにぎやかにすることができたらいいなと思う。何か手掛かりを求め、方法を考えることができれば、もう少し野寄を活性化させられるんじゃないか。村をもう少しにぎやかにさせられるんじゃないかと思う。野寄大日神社の広い場所で土俵を作って、子供が相撲をとっているような、お祭りを開いて、屋台があって、にぎやかになれば楽しいのに。でも、それは今はもう夢物語かもしれない。だから、互いに隣の人が何をしておられるのか、何人家族の家庭なのかぐらいは分かるような、せめてそんな温かい野寄になったらいいなと願う。

取材日　二〇　六年　一　月三〇日
編集　佃悠生

大日女尊神社（おおひるめのみことじんじゃ）

PDF Compressor Free Version

編集後記

丸山　哲

今回、野寄についての冊子を作ることになり、四〇代～八〇代の方々にお話を伺いました。各年代によって少し違うところもあれば、どの年代でも共通しているところもあり、とても貴重なお話を聞くことができました。この冊子を少しでも多くの方が読み、地域にさらに興味・関心を持っていただけたらと思っています。

野上黎吏

今回、ゼミ活動の一環として野寄についての冊子を制作することになり、これは久保ゼミでも初の試みなので、最初は上手くできるか不安でした。四〇代から各年代の方々にお話を伺うところから始まり、そのお話を一度まとめて、何度も添削等を繰り返し、話していただいた内容はそのままに、読みやすくしてみました。是非、ご一読ください。

福留　一毅

この度、野寄地区についての冊子を作成することになり、幅広い年代の住民の方の協力を得て、貴重なお話を沢山伺うことができました。この冊子は野寄の良いところを知ってもらう目的で作成しましたが、野寄に限らず、これを読んで頂いたことをきっかけに、自分の住む地域がどんな所なのか関心を持って頂くことができれば幸いです。

村上　雄一

地域住民の方や本校学生に、もっと野寄のことを知ってほしい、愛着を感じてほしいという思いから本冊子の編集会議は始まりました。この私たちの知らない「野寄」を通じて、読者の皆様に野寄地域の魅力が少しでも伝われば幸いです。

最後になりますが、本稿編集にご協力下さった地域の皆様にはこの場を借りてお礼を申し上げます。

野上　拓希

今回作成にあたり、野寄地域の魅力や歴史、想いや記憶について触れることができました。地名が野寄から西岡本に変わった時の心境や、ボランティアの話など野寄の温かさを感じました。野寄地域全体の、延いては地域住民の温かさについて触れることができる、そういったものを作ることができたと思います。関係者の皆様、ご協力ありがとうございました。

佃　悠生

今日、既に名の消えてしまった「野寄」という地域があります。かつての住民の方々は、転勤や婚姻などのそれぞれの事情により「野寄」を離れ、その地域を知る人は減少傾向にありました。忘れられてはならない歴史や記憶が失われてしまう前に冊子に纏めようという久保先生のお誘いで、私たちがそれに賛同したことが今回の経緯です。

取材を通して、住民個々人が抱いている「野寄」への思い入れが私たちが想像している以上に大きいものだったことが感じられました。何とかそのお気持ちに応えようという想いで作成しましたが、いかがでしたでしょうか？（笑）

この冊子が、甲南生や周辺地域の方々に少しでも「野寄」について興味を持って、もっと知られる契機になれば幸いです。

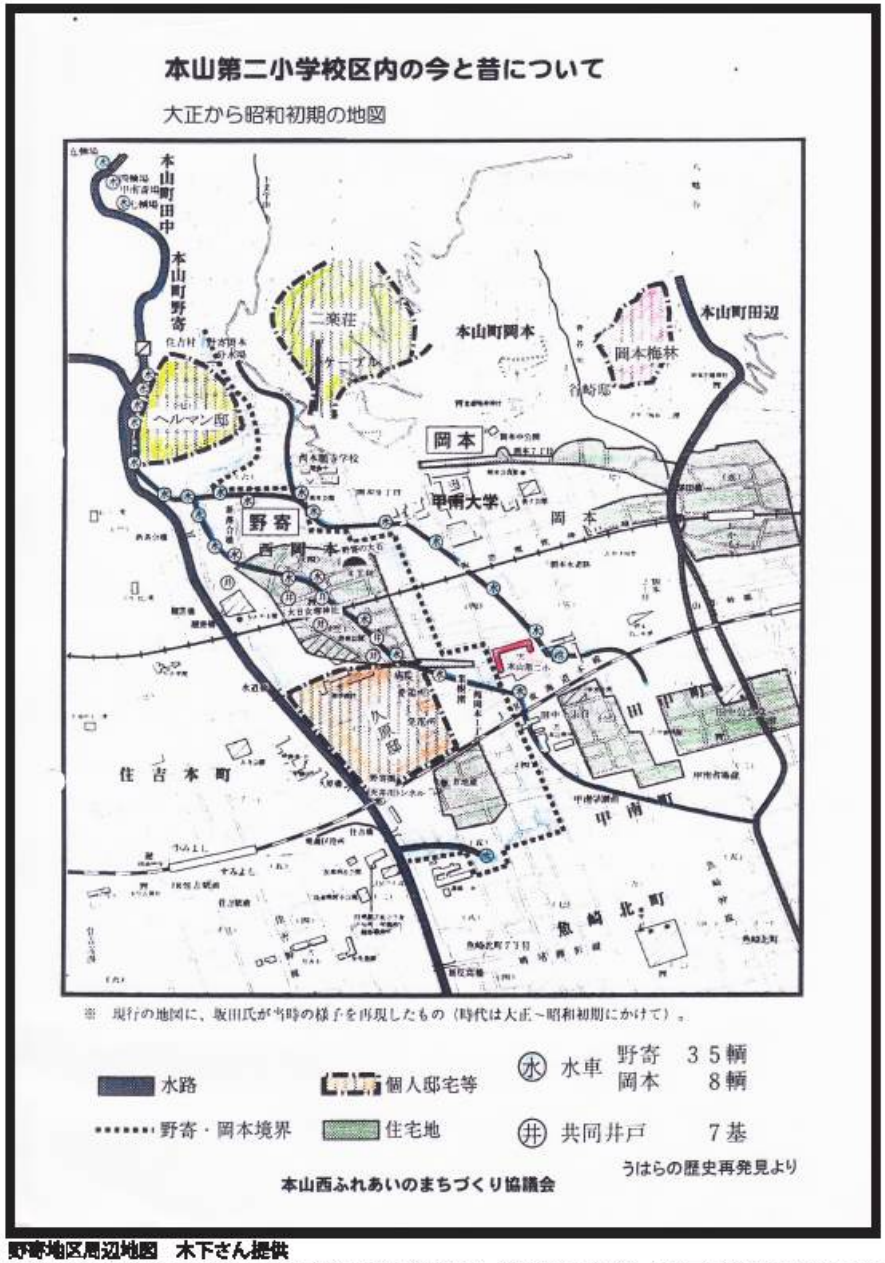
久保はるか教授
本山第二小学校区防災訓練にてご挨拶
主催の地域防災コミュニティ

この冊子が野寄地域を知る一助となれば嬉しいです。野寄のだんじりは壮観ですよ。学生の皆さんも是非、見に行ってみてください。

（久保教授コメント）

久保ゼミ冊子編集者集合写真
上段左から野上拓、福留、野上黎　下段左から丸山、佃、村上

PDF Compressor Free Version



野寄地区周辺地図　木下さん提供
道谷卓「うはらの歴史再発見」（東灘復興記念事業委員会・東灘区役所発行）250 頁記載の地図を加工したもの

野寄地区の主な行事

行事名	月　日	場所	内容（主催）
大日女尊神社初詣	1月1日 ～1月3日	神社境内	（大日女尊神社奉賛会）
とんど神事	1月15日	神社境内	（大日女尊神社奉賛会）
だんじり祭り	5月4.5日		地域内だんじり巡行・本山だんじりパレード・本住吉神社宮入（野寄区地車保存会）
七夕まつり	7月上旬 今年は7月1日	本山西地域福祉センター・野寄会館	（本山西ふれあいのまちづくり協議会）
盆踊り大会	8月下旬 今年は18.19日	野寄公園	（野寄青年会）
大日女尊神社例大祭	9月23日	神社境内	お餅つき大会・大道芸・出店 （大日女尊神社奉賛会）
エンネン縄うち	12月23日	神社境内	神社のしめ縄づくり （大日女尊神社奉賛会）
福火	12月31日	神社境内	新春を迎えての焼き木・甘酒の振る舞い （大日女尊神社奉賛会）

大日女尊神社初詣（1月）

だんじり祭り（5月）

七夕まつり（7月）

大日女尊神社例大祭（9月）